
Fate / Vesperia

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/Vesperia

【NZコード】

NO8888Y

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

世界を救った凜々の明星の一員の一人、コーリ・ローウェル。だが、そんなコーリは突然光に包まれ、異世界で起こっている聖杯戦争にて、マスターである凜とサーヴァント達との死闘繰り広げることに……

更新は一週間に一度

設定（前書き）

なんとなく「行けそう」な感じがしたので、やってみます。最初は設定だけで、

設定

クラス：ナイト（元騎士）

マスター：遠坂凜

真名：ユーリ・ローウェル

性別：男性

属性：秩序・善+悪

筋力：B

耐久：B

敏捷：A

魔力：E

幸運：B -

宝具：S

クラス別能力

能力向上：EX

武醒魔導器の力で戦闘中のみ、能力が向上する。対魔力の力も秘めているが、ユーリの場合は対魔力の力は使えない。

単独行動：A +

ユーリは死んでいないため、マスターからの魔力供給が無くても現界できる

保有スキル

悪運：EX

幸運よりも悪運のほうが高く、呪いの力を持つ武器の効果を食らつても無効にできる。

オーバーリミット

闘気を現界まであげた時のみ、使用できるスキル。その結果、魔術、宝具による攻撃などを一時的に防ぎ切ることが可能。

バーストアーツ：A

オーバーリミット時にマスターから魔力を受け取る事によって、使用できる奥義。その威力は宝具と同等の力もある。

秘奥義：EX

バーストアーツ使用時に、自身の闘気が限界まで達した時のみ使用できる。相手を確実に仕留めることができる。但し、外れることもある。使用後は能力が一時的に下がる

宝具

明星式号

ランク：EX

オーバーリミッソ時のみ、使用可能の宝具。あらゆる魔術を切り裂くことが可能、呪いなどにも有効である。オーバーリミッソが発動状態に使用することにより、真の力が發揮することが出来る。

ニバンボシ

ランク：A

ユーリの愛用の剣。何の特殊な力は宿っていない。

魔装具

ランク：???

ユーリが今まで戦つてきたものの血と怨念がこもっている。使用時はユーリ自身の能力を全てSにすることができる、さらには戦つてきたサーヴァントの宝具と同じ能力が使える。但し、使用後にはユーリとマスター自身の魔力が空っぽになる。

設定（後書き）

とりあえず、ユーリのクラスは最初、ギルドかブレイダーに迷ったのですが、一応元騎士なので、ナイトにしました。あと宝具がチートすぎる気がします。

残りの凛々の明星はどんな感じになるかはわかりませんが、出します。

第一話 ナーフ冒険（前書き）

第一話です。今回は凛との出張ごとでやつます。

第1話 ノーリ召喚

一人の少女が住む屋敷で、床に魔法陣を描き、何やら呪文を唱えていた。少女の名前は遠坂凜

「抑止の輪より来たれ。天秤の守り手よ」

「そう唱え、魔法陣の輝きが最大になる。

（よおおっし！手応え最高！…これはもうこれ以上ないって言う力ードを引き当てた…ツ…！…）

が確かに手応えに喜ぶ。魔法陣の光が消え、地下室が静まり返る。いくら待っても何も起こらない。

「…ちよっと、なんで何も起こらないのよ…？まさか…失敗？そんな！儀式は完璧だったはず…！」

凜が大声を上げた直後。ドオン、と上から大きな音がする。

「…！」

凜が音がした上を向く。

「何…？居間の方から…！…」

急いで上に向かう。

「ちよっとちよっと……！」

階段を上がる。

「ええいもう！ 一体全体、何だつてのよー！ー！」

怒鳴りながらドアを蹴破る。部屋の中はめちゃくちゃになっていたが、凛はそのことについては気にしていなかった。何故ならその部屋の中心に長く伸びた黒髪の男が立っていたからだ。

（ま、まさか、こいつがセイバー？ 確かに剣は持ってるけど、何だか軽装ね。）

「つ、いつたい何だつたんだ？あの光は……」

「ねえ、あんた。私のサーヴァントでしょ。クラスは？」

凛が黒髪の男に聞くと、男は凛の方を振り向いて言った。

「サーヴァント？ クラス？ なんだそりや？」

「はあ？ だからあんたは聖杯に選ばれた英雄の一人でしょー！ だつたら自分が何のクラスか知ってるはずよ。」

「悪いが、お前が何を言つてるか分からんんだが……俺はただギルドの仕事中におかしな光に包まれて、気がついたらここに来てたんだが……」

「ちょっと待つて、あんた英雄なのよね。あんたの言い方だとそれって死んでないってことじゃないのよ」

「英雄？悪いが俺は英雄なんてお高いものになつた記憶はない。それに刺されて高いところから落とされたことがあるが、死んで事はないな。」

男が凛に向かつて言つと、凛は体の力がなくなつたみたいに、座り込んでしまつた。

「ははっ、まさかセイバーを呼ぶつもりが…………こんなおかしなサークulantを呼ぶなんて……」

「おい、大丈夫か？」

あまりのショックでしばらく立ち直れなかつた凛であつたが、少し経つてから凛は召喚した男に聖杯戦争について説明した。

「まずは聖杯戦争のルールね。私たち魔術師はサークulantつづいて使い魔となり『聖杯戦争』という聖杯の所有権を巡る魔術師の戦

いに参加するのよ。」

「そのサーヴァントっていうのが、聖杯に選ばれた英雄の魂つて言うわけか。」

「やう、本来は神話、伝説などの話に出でるものよ。生前の偉業により英雄と認められた者は死後『英靈の座』つてといふく迎えられるの。でも、あんたは死んでないんでしょ、」

「ああ、まだ死んだわけじゃない。それに俺は英雄なんともに興味はないしな。」

男がめんどくわうつて言つと、凛はため息を付き説明を続けた。

「聖杯戦争にはそれぞれ7つのクラスが存在するのよ。セイバー、ライダー、ランサー、バーサーカー、アーチャー、キャスター、アサシン。1Jの7つよ。でも、あんたはその7つのクラスには当てはまらない。」

「その聖杯つていつのがミスしたんじゃないのか？」

「まさか、そんなわけ無いでしょ。聖杯がミスなんて……」

凛が聖杯がミスすることがないと確証を持つて言つと、男はある事を言ひ出した。

「ところで、いい加減俺のことを『あんた』つていつのをやめてくれないか？俺にはちゃんとした名前があるんだ」

「そうだったわね。まだ自己紹介自体してないし……私はあなた

のマスター遠坂凜よ。」

「俺はコーリ・ローウェル。凜々の明星の一員だ。」

「凜々の明星？」

「ギルド名だよ。金とか払えば何でも仕事する。」

「ギルドねえ、じゃあ、私から依頼していいかしら？」

「なんだ？」

「仕事内容はこの聖杯戦争に絶対に私を勝たせなさい。報酬は……」

…

凜が報酬について言おうとした瞬間、コーリが口を挟んだ。

「悪いが、報酬はいいや。」

「なんで？」

「この戦争にはあと6人のサーヴァントっていう英雄がいるんだろ。だったら……俺はそいつらと戦えればいいからな。」

「もしかして、あんたバトルオタク？」

「ひってコーリはひょんな事から聖杯戦争に巻き込まれるのであつた。」

第1話 ナーフ召喚（後書き）

次回はランサー戦とセイバーとの出合戦をやります。

第2話 真夜中の決闘と出金ご（前書き）

今回はランサーとの対決とセイバーの登場です。

第2話 真夜中の決闘と出金

コーリが召喚された次の日、凛が目覚め、リビングに入るとそこには驚くべき光景が広がっていた。

「な、何よ!」れ……

リビングにあるテーブルの上にはいくつもの料理が用意されていた。するとキッチンからエプロンをつけたコーリが現れた。

「起きたか。凛。勝手に朝食の準備しといたが……」

「あんた、サーヴァントのくせに料理なんて出来たんだ。」

「まあな。色々と旅とかしているうちに覚えたからな。それに俺がいた世界の食材とこっちの世界の食材が同じ物だったから助かったけどな。」

（「コーリって、いったいどんな旅をしていたのよ。話し聞く限りじやこの世界とは別の世界にいたとか言つてるけど……）

凛はそう思しながらコーリが作った料理を食べると……

「…………」

「どうしたんだ? 凛。」

（わ、私より上じやないのこれ、くつ、まさか料理で負けるなんて）

ゴーリは知らない内に凛に勝利するのであった。

朝食を食べ終わる、ゴーリが食器を片付けてくると凛が制服姿でやつてきた。

「ゴーリ、私ももう学校行くけど、あんたも付いて来なさい。」

「学校？ああ、勉強するといふか。」

「やうよ。とこつかゴーリがいた世界に学校とかあったの？

「まあ、あるひちやあるが、基本的には勉強とかは自分たちで勝手のやうだけだからな。」

(本当にゴーリは一体、どんな世界にいたのよ。)

コーリの世界について少しずつ興味を持ち始める凛であった。ふと、凛はコーリがつけている腕輪に埋め込んである宝石に眼をやつた。

「ねえ、コーリ。その腕輪についての……」

「ん、ああ、武醒魔導器だよ。これがあれば装備している奴の身体能力が格段と上がり、魔物とかと戦えるようになるんだ。まあ、今は何の力も宿さないものになつたけどな。」

コーリは腕輪を見て、少し悲しそうな表情をしていた。すると凛はそつとコーリの腕輪に触れた。

「な、何だよ。こきなり……」

「ちよつと待つてなさい。今、この宝石に魔力を流しこむから……

凛がそう言ひながら、宝石に魔力を流し、しばらくしてから腕輪の宝石が赤く輝きだした。

「これは……」

「その武醒魔導器つてやつつの機能を復活させといったわ。それなら自由に使えるはずよ。」

「へえ、凛はこんな事出来るんだな。」

「さあ、魔力の供給もやつたことだし、学校に行くわよ。コーリは学校が終わるまで近くで待機してなさい。」

「へいへい。」

ユーリはまだ生きている状態なので靈体化することができない。なので、学校の近くで待機してもらつよつと凛は命じるのであった。

凛が学校の校門を通過とある違和感に気付く。

（これは結界？早速戦争が始まるといつのね。それにしても……この結界、やばいわね。もしも生命を齎かすものだったら……）

凛はそう思しながら、そのまま校舎へと向かうのであった。

そして放課後、

凛はユーリと合流し、結界の痕跡がある屋上へと向かつた。

「これが結界か。それにしても魔術師つていうのはそんな下劣な結界とか考えるんだな。」

「その言い方だと、ユーリの世界にも結界があるのね。」

「ああ、魔物が侵入できぬようじつて街を守る結界だった。それで、凛。その結界を壊すにしても……」

ユーリはそう言いながら、腰に差した剣『ニバンボシ』を抜くと……

「どうやら、邪魔する奴がいるみたいだぞ」

「えっ、」

ユーリと凛が屋上のフェンスを見るとそこには青い髪に体にフィットした青い服を着ており、手には真赤な槍を持っていた男がいた。

「ほら、怪しい気配がするって聞いて来てみれば……よく俺がいることに気がついたな。」

「！」やつのぞき見るなら、殺氣くらい消したらどうだ？

「ふん、面白い男だ。俺は見ての通りクラスはランサー。お前は何だ？セイバーか？」

「いや、俺は……」

ユーリにはクラスがない。そのことを他の魔術師に知られれば、真っ先に凛が狙われることとなる。なにせ、クラスがない＝弱いとい

うことになりかねないのだ。だから、コーリはランサーに向かってこの答えた。

「俺はナイトだ。」

コーリの宣言を聞いたランサーは少し驚いていた。まさか7つのクラスしか無いはずが、8つ目のクラスを名乗る奴がいるとは思っても見なかつた。

「おもしれえ、勝負だ。ナイト！」

「いいぜ、凛。下がつてろ」

「任せたわ。」

凛が後ろへ下がると、コーリとランサーが同時に攻撃を仕掛ける。コーリはランサーの槍を剣で受け流し、ランサーはコーリの剣を槍で弾く。二人の実力は全くもつて互角に近いものであつた。

（コーリ。かなり強いじゃない。もしかしたらセイバークラス以上に凄いの引き当てちゃつた？）

コーリの強さに感激している凛。そんな中、コーリはランサーの連続突きをバク転で避けた。

「その強さ。その身のこなし、騎士が使つよつた剣技ではない。我流か？」

「へえ、まだ特技とか見せてないのに、よく気がついたな。確かに基本的には騎士団で教わつたもんだけど、あんなもん途中で敵に攻

撃されちまつから、自分でアレンジしたんだよ。」

（コーリって、ナイトを召喚する資格あるのかしら？）

凛は心のなかで突っ込みを入れると、ランサーは楽しそうに笑っていた。

「ははっ、本当におもしれーやつだ。型にはまつた攻撃じゃ一いつ
が少しばかり分が悪いな。だったら……我が必殺の一撃にて」

槍を持つランサーの手に更に力が入る。

「貴様を討つ……！」

ランサーが凄まじい殺氣を放つ。コーリもその殺氣を感じて剣を構
え直す。

（なんて魔力なの……）

凛もランサーの槍に込められていく魔力を感じ取っていた。

（まるで周囲の熱を根こそぎ奪つてるようだわ！禍々しい殺氣があ
の槍先に集中していく……！……まさか……！）

凛はランサーが持つ槍の正体に気が付いた。

「その心臓、貰い受ける……！」

「防御しちゃ駄目よ。避けなさい。」

「ゲイ」

凛が叫ぶが時既に遅し、ランサーはユーリに向かつて槍を投げつけていた。

「ボルグ！！」

因果の理を捺じ曲げる槍。『ゲイボルク』。それはすなわち「心臓を穿つ」という結果を「槍を放つ」という原因より先に生じさせてしまうこと。故に放てば敵の心臓を捉らえ、避けることは不可能。真紅の魔槍がユーリの心臓に迫り、ユーリはそのままフェンスを突き破り校庭へと落ちていった。

「ユーリ！！」

「サーヴァントは処理した。残るは……魔術師の小娘だけ。」

凛を殺そうとランサーは近づく、凛は咄嗟にポケットにしまい込んだ宝石を取り出そうとしたが、突然ランサーの足元に赤い閃光が現れた。

「これは……」

その閃光の正体はランサーの持つゲイボルグだった。何故、こうして戻ってきたのかランサーも凛も分からなかつた。すると、破壊されたフェンスの向こうからユーリがよじ登ってきた。

「つう、ゲイボルグか。俺がいた世界でもジュディがそれを使ってた覚えがあつたけど、まさか心臓を狙つてくるとはな……」

「あ、キサマ、どうやつ……」

ランサーがユーリの方を見ると、ユーリの右肩から血を流していた。

「咄嗟に右肩をゲイボルグの軌道に置いて防いだんだよ。さすがに肩が上がんなくなつたけどな……まだ戦えるぜ。」

ユーリが剣を構えなおした。

「クツ……ハツハツハツ！ハーハツハツハツ！…

突然、ランサーが高らかに笑い出す。そして……

「いいぜ、お前、本当に……ゲイボルグをそんな方法で防ぎ、あまつさえ、俺の宝具を使つていた奴がいるとはな。さあ、続けるぞ。ナイト」

「来い！」

ユーリとランサーの間に殺氣の渦が巻き起こる。だが、ランサーは突然槍を下ろした。

「どうやら、余計な観客がいるようだな。」

ランサーがそう言った瞬間、屋上の扉から誰かが走り去る音が聞こえた。ランサーはそのまま音の正体の元へと向かつた。

「どうしたんだ？あいつ？」

「マズイわ。ランサーの奴、目撃者を消す氣よ。追うわよ。ユーリ

「待てよ。まだ肩の治療が……」

「悪いけど、私は治癒とかできなこのよ。」

「はあ、凛、やさかに行つて。追いつくから……」

「分かつたわ。」

凛は田撃者とランサーを追つた。残つたヨーリは剣を地面に突き刺し、

「守護方陣！！」

ヨーリの周りに白く輝く魔方陣が現れると、ヨーリの肩の傷が少しずつであるが塞がつっていく。

「とりあえず、フレンが使うのを見よつ見真似でやつてみたけど、さすがに全開まではいかないか。さて、凛を追うか」

コーリは校舎の中をクロウロと歩き回つてゐると、凛とじまつたり遭遇した。

「凛。あの野郎は？」

「逃げられたわ。田撃者を消し終わつて、自分のマスターの元に帰つたはずよ。」

「その田撃者とか言つのは？」

「死にかけてたけど、何とか助けたわ。これでも私は魔術師なのよ
いや、待てよ。お前、回復ができないとか言つてたよな。出来る
じゃねえか。」

コーリは怒りながら、凛に詰め寄ると凛は……

「しようがないじゃない。あいつを助けるために大切な宝石使つち
やつたんだから、それにコーリの場合は大丈夫そうだったから……

「くつ、まあいい。肩の傷も少し直せたし、これからどうする? リンサーを追つか? それともその助けた奴のところにでも行くか?」

「はあ、何ですよ。」

「いや、お前が治して、家に帰らせたんだろ。だけよ、それって

マズイだろ。始末した奴が生きているってランサーの奴が気がついたら……またそいつ殺されるぞ」

ユーリが冷静に状況を言つと、凜は走りだした。

「行くわよ。ユーリ」

「たくつ、忘れてたのかよ。」

凜の案内で田撃者の家へとたどり着き、塀をよじ登りながら家の中に入り込むとそこではさつきのランサーと今度は金髪の鎧を着た少女が戦っていた。

「あれは？ サーヴァントか？ 凜」

「え、ええ、多分セイバーよ。」

凛とコーリはじつと二人の戦いを見ていると、ランサーはコーリの姿に気がついた。

「ちつ、ナイトまで着たか。このままじゃ分が悪いな。じゃあな！」

ランサーは塀を飛び越え、夜の街へと消えていった。するとセイバーは……

「新たな敵か。来い！」

剣を構えるような格好を取るセイバー。凛はセイバーが持つ剣についてあることに気がついた。

「不可視の武器！？」

「見えない剣つて奴かそれ？」

「そうね、気をつけて……来るわよ

「しょうがねえ、」

コーリは剣を回転させながら、セイバーへと向かっていった。

第2話 真夜中の決闘と出会い（後書き）

次回辺りでセイバーとの戦いが終わります。

第3話 セイバー vs ユーリ（前書き）

今回はセイバーとユーリの戦いです。次回辺りにバーサーカーと凛々の明星のメンバー一人を出す予定です。

第3話 セイバー vs コーリ

凛が助けた少年の屋敷へと向かったコーリと凛。だが、そこでは新たなサーヴァントセイバーが襲撃してきたランサーを退けていたが、セイバーは今度はコーリに攻撃を仕掛けってきた。

「ハアア！！」

セイバーの見えない剣をコーリは二バンボシで受け止める。

「さすがに見えないんじゃ、避けることが出きないな。」

「私の剣を受け止めると、やりますね。あなた、」

セイバーとコーリは同時に後ろへ下がった。コーリはそのまま剣での戦いでは少しばかりセイバーの方が分があると思った。

（肩の傷も治りきってないしな。このままだとセイバーに押されちまうが……）

コーリはさりげにセイバーと距離を置き、剣を下から思いつきり振った。

「蒼破刃！！」

振った瞬間、セイバーに向けて衝撃波が放たれた。セイバーはその衝撃波を避け、コーリに接近した。

「ハアア！」

「貰つたぜー、囁烈襲！」

剣を振りかざしたセイバーは、胸ががら空きとなり、コーリはそこに何発もの拳を食らわせた。

「くつ、剣術だけではなく、武術まで……やりますねあなた」

「お前じゃ、女にしては俺の攻撃を受けるなんてな。」

「ですが、私はまだ本気を出しありません。あなたも肩の傷のせいで本気を出し切れていな」よつですし」

セイバーはランサーから受けた肩の傷を見抜くと、コーリは剣を鞘に収めた。

「そうだな。あんたとは全快の状態で戦いたいからな。」

「ええ、それに貴方からはシロウを殺そうとする『気が無い』とわかりました。」

「そつか、だとよ。凛」

離れていた所で様子を伺っていた凛と凛が助けた少年、セイバーが言ひには土郎という前からしい。

「そうね。衛宮くん。あなたに色々と話せなきやいけないみたいだから、中でちよつと話しましょう」

「ああ、」

ユーリたちは大きな屋敷の中へ入り、聖杯戦争や魔術師について話した。士郎の話から士郎もまた魔術師の一人でもあるらしいが、使える魔術は物質の強化らしい。

「じゃあ、行くわよ」

「行くって、どうしてさつ？」

「教会よ。内容は後で話すわ」

ユーリたちは夜の街を歩いていた。目的は教会に向かつためだ。
「なあ遠坂。一体何しに行くんだ？」

「この戦いの”監督役”に会いに行くのよ

「監督役？」

「聖杯戦争を取り仕切つてる奴よ。貴方がこれからどうあることか。会つておいて損はないわ」

凛と士郎がそんなことを話している中、ユーリは隣を歩くカツパ姿のセイバーに話しかけた。

「セイバー。お前、その格好はどうなんだ？」

「すみません。普通なら靈体化できるはずなのですが、どうやら出きないらしく。シロウがこれを着てろと言わされたので……」

「怪しそうだな」

ユーリがそつそつ「ミミを入れるのであった。

教会へたどり着き、凛と士郎の二人は教会の中に入り、ユーリとセイバーは教会の外で敵が来ないか見張っていた。そんな中セイバーがユーリにあることを聞いた。

「そういえば、ユーリ。あなたは一体何のサーヴァントなのですか？クラス的には私と同じセイバーに近いようですが、」

「そりだな。俺にはクラスは無いらしい。」

「クラスがない？ それは本当ですか！？」

セイバーが少し驚いていた。ユーリほどの実力者にクラスがないと
いつとそれはそれで驚きものだ。

「クラスがない。でも貴方は英雄として召喚されたのでは……」

「英雄か。悪いが俺はそんな英雄なんて名誉なものには興味がない
ぜ。」

「英雄に興味がない？ それはどういって？」とですか？」

「俺は英雄より、ギルドで仲間と楽しくやっていたほうがいいから
な。英雄は親友の方があつてるからな。」

ユーリの表情を見たセイバー。ユーリの表情はどこか遠くを見つめ
る感じがした。

しばらくして、凜と土郎が戻つてくる。

「お待たせ。衛宮君にはしっかりと教え込んでおいたから

「やつか」

「セイバー。ちよつと頼つないマスターだけど、これからひみつへ
頼む」

士郎が手を差し出す。

「はー。じゅうじゅマスター」

セイバーが差し出された手を握る。

「んじゃ、用も済んだじとつと帰るわ」

「やうね」

一行は歩を出すのであった。じつしてコースの一丁目は終わりを告げる。はずであったが、一行を見つめる二人組があつた。

「やあ、と出てきた

影の一つが喋る。

「行こう。バーサーカー。わたし待ちへたびれやつた！」

夜の街を走る一人の少女がいた。

「ユーリを探しに来たはずなのに……」これは一体……折角精霊たちが力を貸してくれたのに……」

その少女はピンク色の髪を揺らしながら走るのであった。

第3話 セイバー vs ノーリ（後書き）

次回バーサーカーとのキャラの登場です。ちなみに自分的には多分Fateで一番好きなキャラです。

第4話 狂戦士襲来（前書き）

ついにバーサーカーとの戦いが始まります。まだ序盤なのにユーリがピンチになります。

第4話 狂戦士襲来

教会からしづらへ歩いてたれをで、凛が立ち止まつた。

「ユーリで別れましょウ衛宮君」

振り返つて士郎に言つ。

「わかつてるとと思うけど、次に会つ時は敵同士よ。言つておくけど手加減なんてしないわよ」

「セイバー、今度はしつかり決着つけよ」

「ええ、今度は引き分けといつ結果に終わらせません。」

ユーリはセイバーと握手を交わしていた。そんな一人の光景を凛と士郎は微笑みながら見ていた。

「それじゃあ、行きましょう。ユーリ」

「ああ、」

「どうしたの？ ユーリ。」

ユーリは先を歩く凛の後を付いて行こうとした瞬間、ユーリ突然立ち止まつた。

「凛、士郎、セイバー。気をつけひ。どうやうお密さんみたいだぜ。」

「

ゴーリーは「バンボシを抜き、鞄を捨て、坂の方を見つめていた。凛たちも坂の上を見つめる」とやうな雪のよつね白い髪の少女が一人がいた

「わ帰つやいの?夜はまだまだこれからなのよ」

「子供のくせに悪こわい殺氣を出してやがつて……何者だ?」

ゴーリーが少女に向かって立と、少女は薄く笑つた。

「はじめまして。わたしはイリヤ。イリヤスファイール・フォン・アインツベルンと言えばわかるかしり?」

「なんですか!?」

凛が驚愕する。

「知つてゐるのか遠坂?」

「アインツベルン…。毎回、聖杯戦争にマスターを送り込んでくるヤツ!」

「え…それじゃマスターなのかー?」

「わうだよ。お兄ちゃん

イリヤが笑いながら話す。

「でもわたしの一一番の目的はね…」

ぐるりと体を一回転する。

「お兄ちやんを殺す！」と

少女の声とは思えない冷たく、殺意の籠つた声でそう告げた。

「……」

士郎が思わず一歩後ずさる。

「わたしね、この口が来るのをずっと待つてたんだ」

無邪氣に笑いながらイリヤが話す。

「お兄ちやんを殺す！」の口を…おいでバーサーカー…

イリヤの声と共に地を揺るがす大きな音がする。イリヤの後ろに鉛色の巨人が現れる。鋼のような肉体。他を圧倒する威圧感。見ただけで相手を射殺せそうな眼。

「……」

その圧倒的な”脅威”に凜と士郎は金縛りにあつたように動かなくなってしまう。

(これがバーサーカー！？なんてテカさよ…)

凜が驚愕の目でバーサーカーを見る。そんな緊迫した中、コーリは

「はは、まさかこんなに早くこんな奴に会えるなんてな。」

笑っていた。バーサーカーの脅威を感じて凛と土郎は怯えているのに、ユーリは強敵に会えたということに嬉しそうにしていた。

「へえ、そつちのお兄ちゃんは私のバーサーカー見て怯えないんだ？面白い人だね。バーサーカー、やつちやえ！！」

『…………』

バーサーカーは咆哮しながら、ユーリに突進してきた。ユーリはバーサーカーの突進を何とか避け、避けた瞬間、バーサーカーに向かって攻撃を仕掛けた。

「絶風刃！」

風の刃がバーサーカーの体を切り裂いた。

「見掛け倒しだな。」

ユーリがイリヤに向けて挑発をすると、イリヤは……笑みを浮かべていた。

「ふふ、その程度で私のバーサーカーがやられると思つてゐるの？」

「何！」

「ユーリ！後ろ！」

凛の声を聞き、ユーリは後ろを振り向くとそこには大剣を振りかざしたバーサーカーの姿があった。

『…………』

ユーリは咄嗟に二バンボシで大剣を防ごうとしたが、そのまま後方に吹っ飛び壁に叩きつけられる。

「がはつ！！」

ユーリが血を吐き、壁が音を立てて崩れた。

「「ユーリ！」」

凛と士郎の二人がユーリの名前を呼ぶが、ユーリは反応しなかつた。

「シロウ。下がってください！」

セイバーはカツパを脱ぎ捨て、不可視の剣を構え、バーサーカーに向かっていった。

不可視の剣でバーサーカーに斬りかかる。だがセイバーの剣はバーサーカーを斬ることなく鈍い音を立て弾かれてしまう。

「…………」

バーサーカーが吠えながら大剣を振るう。それを跳んで避け、後方へ移るセイバー。バーサーカーが続けて大剣を振るい、それを剣で受け止める。力負けして少し後ろに押されてしまう。

「く…！」

なんとか大剣を弾く。だがバー サーカーの猛攻は止まらない。バー サーカーが大剣を振るたびに、車や電柱など周りの物が破壊される。巨体に似合わぬセイバーを上回る素早さ。当たれば”死”へ繋がる重い一撃。セイバーはバー サーカーの攻撃を捌き続ける以外、方法は無かつた。

「なんてバケモノよ…！」

そう言つて凛は左腕の袖を捲くる。そして腕に刻まれた魔術刻印が光る。

「くらえ…！」

凛の手から黒い弾丸、ガントを放ちバー サーカーに直撃するが、バー サーカーは無傷であつた。

「そんな…！？全然効いてない…？」

「無駄よリン。バー サーカーには一定以上のランクの魔術じゃないと効かないわよ。それにそっちのサー ヴァントももう少しで終わりそうだね。」

笑いながらイリヤが話した。凛と士郎はセイバーの方を向くと、セイバーは頭から血を流し倒れていた。

「セイバー！」

「くつ、強すぎる。」

「誰もわたしのバーサーカーには勝てないわ」

イリヤがバーサーカーの隣に立つ。

「バーサーカーの真名はヘラクレス。古代ギリシャ最大の英雄な
よ……」

楽しそうにイリヤが喋る。

(ヘラクレス！？)

「サーヴァントは人々の認知度に強く影響されるの。」この世に広く
知れ渡つた英雄ほど、そのサーヴァントは強力になる

サーヴァントの強さについて話す。

「だから、ヘラクレスに勝てるものなんかいないのよ。」

その時、セイバーが剣を突き立てて、立ち上がりつゝある。

「セイバー！？」

士郎がセイバーのそばに寄る。

「もうやめりー！」のままじや お前本当に死んじまつでーーー。」

士郎がセイバーにそう叫ぶ。

「シロウ……」

セイバーが士郎の顔を見る。

「サーヴァントが最も優先すべき事は…マスターの命を護ることです」

「…」

「ですから…いかなる敵が現れようと、私は必ずマスターを護ります！」

力強く言葉を放つ。

「ふーん。まだバーサーカーと闘つ氣なんだ。まあ遊んであげてもいいけど……その前に…」

そう言ってイリヤは凛を見る。

「…」

「バーサーカー！先にサーヴァントのいないマスターを殺しなさい！」

「…！」

吠えながら凛に向かつて突進する。

「遠坂つ…！」

士郎が走り出すが間に合わない。

「…………！」

凛が目を閉じた。だが、バーサーカーの攻撃はいつまで経っても来ない。凛は恐る恐る目を開けるとそこには血だらけのゴーリがバーサーカーの大剣を二バンボシで受け止めていた。

「イリヤって言つたか？悪いが凛は俺の依頼主だ。勝手に殺そうとするんじゃないぞ」

ゴーリの体を白いオーラが包み込んでいた。

「……」

凛は驚きながら呟くと、セイバーはゴーリが出してくる白いオーラの正体に気がついた。

「あれは、闘氣。」

「闘氣？」

隣にいた土郎がセイバーに何か聞くと、セイバーは……

「闘氣は魔力と近いものです。闘氣は誰にだって出せますが、あそこまではつまると浮かび上がるとは……」

「へえ、お兄ちゃん。やるね。バーサーカーの攻撃をまともに受け立つてるなんて……でも、もう限界のさずだよ。」

「へへ、氣づいていやがつたか。」

凛がユーリの足元をみると少しだが震えていた。ユーリが数多くの死闘を繰り広げたとはいえ、ランサーによって傷ついた肩のせいで普段通りの力を出せず、さらにはバーサーカーの攻撃を受けて、血を流しそぎた。

(まずいわ。この状況じゃ、私達一人はここで……死ぬ)

凛が諦めかけていた。そんな中バーサーカーはもう一度ユーリに向かつて大剣を振りかざした。この場にいた全員がユーリの死ぬとわかつてしまつた。だが、

「堅牢なる守護を……バリアー！」

突然ユーリを包み込む白い障壁がバーサーカーの攻撃を弾いた。凛達、イリヤも声が聞こえた方を見るとそこには桜色の髪の少女がいた。ユーリはその少女を見て、名前を呼んだ

「え、エステル？」

「ユーリー探しましたよ。ようやく見つけたと思つたら傷だらけですし、今治します。そちらの騎士さんも。白き天の使い達よ、その微笑みを我らに……ナース

エステルが呪文を言うと、どこからともなく天使のような精霊がユーリとセイバーを白い光に包み込み、一人の傷を癒した。

「さすがはエステルの治癒呪文だぜ。」

「これは……傷だけではなく体力も……」

エスティルの呪文を見て、凛は驚いていた。

「こんな高度な呪文を……私と変わらない子が……」

「さて、バーサーカー。いつから再戦と行ひつぜ」

ユーリが剣を構え直すと、イリヤは……

「面白いね。お兄ちゃんたち。ねえ、名前は？」

「あん？ ユーリ・ローウェルだ。クラスは多分ナイト」

「あはは、本当に面白いや。今回まはのまま見逃してあげる。」

イリヤとバーサーカーはそのまま夜の闇へと消えていった。

突然現れたエステルはユーリとセイバーの治癒を行つた。

「とりあえず、お二人の怪我を治しました。」

「すまない。」

セイバーが丁寧にお礼をいふと、ユーリは……

「ところで、エステル。お前、何でこんな事に……」

「それは……」

エステルが何故この場にいるか言おうとするが、凛がユーリ、エステル、士郎、セイバーに向かつてこんな事を言つた。

「ちょっと待つて、積もる話もあるだろ？」「悪いけど、衛宮くん。あなたの家で色々と話したいんだけど」

「ああ、別にいいけど……」

こうしてユーリたちはバーサーカーの脅威を回避するのであつた。

第4話 狂戦士襲来（後書き）

とうあえず、エステルを登場させました。次あたりでるのは、リタにします。

第5話 休戦と訪れた理由（前書き）

今回はエスティルがじつやつて来たかの理由をやります。

第5話 休戦と訪れた理由

バーサーカーを退けたユーリ達。一行は傷の手当のため士郎の家に来ていた。

「ねえ衛宮君。 一つ提案があるんだけど」

「提案?」

「私と同盟を組まない?」

「同盟! ?俺と遠坂がか! ?」

凛の突然の提案に驚く士郎。するとエステルに肩の傷を癒してもらつていてるユーリがこんな事を言つてきた。

「確かに、今回はエステルが来たから何とかあいつを倒せたけどな。次はそうは行かないだろ。それにあのイリヤってやつはどうにも、士郎を狙つてるみたいだし、それに俺まで興味持たれたからな。俺は凛の提案はいいと思うぞ。」

「シロウ。私も賛成です。一刻とはいえ、ユーリと手を組むことはいいと思います。」

セイバーも凛の提案に賛成する。士郎はユーリとセイバーの話を聞き、凛に手を伸ばした。

「分かったよ。遠坂。同盟を組む」

「ええ、よろしくね。」

士郎と凜は握手を交わした。これで同盟を組むことになった二人であつたが、コーリはエステルにあることを聞いた。

「それで、エステル。お前は何でこの世界にいるんだ？お前もどつかの魔術師と契約したのか？」

「魔術師？いいえ、私は精霊たちが力を貸してくれて、ここに来たんです。」

エステルの話を聞いて、凜と士郎は同時にマークを浮かべていた。

「あいつらが。何でまたそんなことを？」

「はい、実は……」

「ちょっと待ちなさいよー！」

エステルの話に凜が割り込んでくると、コーリは……

「どうしたんだ？凜？」

「……何日か色々と遭つて聞けなかつたんだけど、コーリ、あんたの世界はどういうところなのよー普通に精霊とか話してるけど、私達が知つてゐる精霊じや、そんな簡単に次元を超えたりとか出きないわよー！」

「やういえば、まだ話してなかつたつけ。折角の機会だ。話してやるつぜ。エステル」

「はい。」

ユーリとエステルは凛たちに自分たちの世界について話した。

古代の技術で生み出された魔導器の恩恵を受ける世界テルカ・リュミレース。人々は、魔導器の力によって街に結界を張り、魔物に脅かされることのない平和な日々を送っていたある日、帝都ザーフィアスの下町に住んでいたユーリは、下町の水道魔導器から魔核を抜いた泥棒追っていた。それをきっかけにユーリの親友であるフレンが危ないと知り、次期皇帝候補である姫であるエステルと出会い、ユーリとエステルと相棒のラピードと一緒にフレンの所へ向かい一つ魔核泥棒を追うことになった。

「つで、そつちのエステルつて子。姫さまなの！？」

「はい。そうです。」

話の途中で凛がエステルにそんなことを言っていた。すると士郎とセイバーは……

「確かにそう言わればそうとしか見えなくなつてきた。」

「最初会つた時から私は、彼女から気品を感じていましたが……」

「どうか、話を続けるぞ。」

ユーリの一言で全員が返事をした。

魔核泥棒の黒幕である紅の絆傭兵団の首領・バルボスを打ち倒し、魔核関係の事件は終わつたと思ったが、そんなユーリ達の前に突如現れた人語を喋る謎の魔物がエステルの命を奪おうとする。騎士団とギルドの助けを借りて難を逃れたものの、エステルは自分に向かられた「世界の毒」という言葉に戸惑う。世界の毒とは、満月の子とは何なのか？ 真実を知るべくエステルは、ユーリら新興ギルド『凛々の明星』に護衛を依頼し、謎の魔物を追つ中、帝国の闇や世界の危機について知るのであつた。

「その満月の子って何なのよ？」

凛がエステルに聞くと、ユーリが代わりに答えた。

「まあ、簡単に言つと、魔導品が無くても術が使える奴のことだ。普通なら俺達の世界にあるエアルつてやつを利用して術とか掴んだが、エステルの場合はそんなの関係なく使える。」

「魔導品つて確か、ユーリがついている腕輪だっけ？」

「ああ、そうだな。」

ユーリはそう言いながら腕に付いている魔導品を見つめていたが、その表情は少し悲しそうであった。するとエステルは……

「でも、満月の子は私達の世界のエアルを乱すものなんです。エアルが減れば世界は滅びかねない。それを防ぐためにテルカ・リュミレースに大昔からいる魔物、始祖の隸長が私を殺そうとしてきました。」

「だけど、俺たちはアイツらにそんなことをさせないように、エスティルがエアルを乱さずに術を使えないかつて調べることにしたんだ。だが、そのエステルの力を利用しようとしたのが……帝国の騎士団長アレクセイだ。」

アレクセイはエステルの力を利用し、ザウデ不落宮と呼ばれる巨大な兵装魔導器と考えたアレクセイが、世界を支配するために利用しようとしていた。そのためにエステルの力が必要であつたため、エステルを捕まえ、コーリ達を傷つけていった。

「あの時はこれ以上、コーリたちを傷つけてしまうなら、死んでもいいって思っていました。だけど、それを止めてくれたのはコーリでした。」

「このわがままな姫様は言つても聞かないからな。とりあえず俺たちは捕まつたエステルを助けて、黒幕のアレクセイを追い詰めたんだ。」

「でも、アレクセイは知りませんでした。ザウデのほんとうの意味を……」

ザウデの正体は古の満月の子たちの命を動力にした巨大な結界魔導器。テルカ・リュミースを結界で包み、星喰みを封印していたに過ぎなかつた。後にアレクセイがシステムを起動してしまつた事で結界は崩壊し、星喰みの帰還という事態を招いてしまつた。星喰みは世界を覆うほどの『災厄』であつた。

コーリ達はその星喰みを消すために世界中にある魔核を全て精靈に変えてエアルの減少を防ごうということにたどり着き、争いを続けていた世界は一つになつたのだった。

話を聞き終えた一行は、凛とコーリとHスティルは一度家に帰るのであつた。士郎とセイバーは凛たちと別れると、セイバーは庭に出てあることを思いつめていた。

（騎士である者が世界を支配しようとは…………世界が違うだけで人の心といつものでは変わるものなのだな。）

セイバーは自分が生きていた時代のことを思い出している中、コーリのことである事を考えていた。

（コーリ・ローワル。彼は何故あそこまで英雄ではないと言つて

いるのだ？それに……ヨーリたちから聞いた話、まだ何か隠していることがある。）

一方凜たちは……

「それで、結局、エステルがこっちに来た理由は何だつたのかしら？」

「そういえば、聞いてなかつたな。」

「そうでした。実は、ヨーリが行方不明になつたつて力口ルから聞いて、みんなで世界中を探し回つていた時に、私の中の精霊たちがヨーリがいる世界に星喰みクラスの災厄をもたらす物があるつて聞いて……精霊たちがこっちの世界に連れてきたんです。」

「星喰みクラスの災厄？ 何か心当たりあるか？ 凜？」

「ないわね。もしかしたら、どつかのサーヴァントがもたらすかもしれないじゃない。」

凜の言葉を聞いて、納得するヨーリ達であったが、それは後に最大

の敵との戦いになるとは思っても見なかつた。

「ところ訳で今日からリリードお世話をなるから、よろしくね衛宮君
笑顔でやさしげる凛。

「……なんだや？」

「私達は戦略上、常に行動を共にする必要があるの。あつ私ビビで
寝ればいいの？」

「……ああ……離れがあるからこの部屋を……つづりよつと待てー遠坂
士郎が止めるのも聞かず、凛はコーリを連れて歩く。部屋に着いて、
持つてきた荷物を出す。

「遠坂は女の子なんだから、リリのままいんじやないか？」

「衛宮君。アンタも魔術師の端くれなら覚悟を決めなやー。」

「諦めたまうがいいと想つた。士郎」

ユーリはやつらに言こながら十郎に同情するのであつた。

「それじゃあ、私とエステルは一緒に部屋で、ユーリも勝手に部屋使つたらっ。」

「つて、家主俺なんだけどー。」

「うして、夜は明けるのであつた。

第5話 休戦と訪れた理由（後書き）

次回はライダー戦でもやつたいと思こます。

第6話 暗闇に潜む者たち（前書き）

今回はひょっとした話をやり、大河たちとの出会いをやります。

第6話 暗闇に潜む者たち

ユーリ達がバー・サー・カーと戦っていた時、とある屋敷の地下では三人の男がいた。一人は老人。もう一人は黒い礼服を着た男。そしてもう一人は……銀髪の鎧を着た男。三人の男の前には魔方陣が描かれていた。

「キヤスターがルールを破り、本来のアサシンを呼び出すことができなくなつたが、お前が連れてきたこの男のおかげでどうにかできそうじや。」

老人が礼服を着た男に向かつて言つと、男は……

「今回の聖杯戦争は些かイレギュラーが多い。一つは本来この世界に呼び出すことが出きないはずの者が召喚されたこと。もう一つは次元を超えて8人ほどこちらに来たこと。このままで聖杯戦争事態が狂つてしまつ。ならば、一度歪んでしまつたことをもう一度歪み直し、元の聖杯戦争へ戻すためには……これが必要だ。」

「では、貴様が持つ令呪を渡してもらつぞ。異世界の騎士よ。」

「ああ」

銀髪の男は左手に刻まれた紅い刻印を老人の右手に写した。すると魔方陣から黒い腕が伸びた。

「クク、感謝するぞ。これで間桐の計画は成就する。」

士郎が目を覚ますと何故か居間の方が騒がしかつた。士郎は疑問に思いつつ居間へと向かうとそこでは……

「もう、遠坂さんは、」

「いえ、私は本当のことと言つてるだけですから」

「それでこれにコレを入れるともうとくまくなるからな」

「なるほど、勉強になります。」

「エスティル。おかわりを」

「はい、今お持ちいたします。」

士郎のクラスの担任である藤村大河、士郎の後輩で弓道部の間桐桜の二人はいつも朝食の時間にこうしてきてくれたりするが、何故か

今日だけは凛たちと仲良さそうに団欒していた。それを見て驚いている士郎。すると大河は……

「あっ、士郎。おはよう。聞いたわよ。遠坂さんの家、改修中で暫くの間ここに住むんだって、それに切嗣さんの知り合いの人たちも来てるんだって、」

大河の話を聞いて、士郎は凛を睨むと、凛は笑顔で……

「「めんなさい。衛宮くん。昨日は遅かったみたいだから、ユーリ達が朝食作ってくれたみたい。」

（遠坂。猫かぶりやがって……………といつか、ユーリ達も馴染みすぎだろ。）

士郎は心のなかでツツツミミを入れるのであった。

朝食を終え、桜は部活の朝練へと向かい、大河も職員会議があると いうので早めに学校へ向い、士郎は……

「遠坂。お前……」

「あら、私達が衛宮くんの家にいる理由、いい考えだと思つたんだけど、」

「だつたら、それを昨日の時点できつとおいてくれよ。」
「ちはいきなり過ぎて訳がわからなかつたぞ。」

「あら、それは大変だつたわね。それに藤村先生に頼むことがあつたんだけど、了承してくれたわ。」

「了承？何をだ？」

「おーい、凛。これでいいのか？」

ユーリが凛を呼ぶ声が聞こえ、士郎が振り向くと何故か穂群原学園の制服を着たユーリとエスティル。そしてセイバーまでもがいた。

「似合つてゐるじゃない。」

「似合つてゐるじゃないねえよ！何でユーリ達が制服着てるんだよー？」

「だつて、三人とも靈体化とかできないし、とはい、エスティルは普通にこつちに来たから出きないけど、他の一人の場合はこのまま家で留守番させていたら、もしも学校とかで他のマスターが襲撃しきたら大変じゃない。だから、三人ともこつして学校で自由に動けるようにね。」

凛のとんでもない計画に土郎はただ啞然とするだけであった。

そして学校では転入生として入った三人が自己紹介をし、直ぐにクラスに馴染んでいるのであった。そんな中、屋上では一人の少女が

.....

「全くなんなのよ。この世界は……あの馬鹿追つてきたらこんな場所に出ちゃうし、それにこの術式、何かしら？」

少女はそう言いながら、地面に書かれた魔方陣に触ると……学校全体に紅い結界が発動したのだ。

「あれ？ 私何かまずった？」

少女が冷や汗を搔きながら言つと、突然後ろから声が聞こえた。

「まさか私の結界を勝手に発動させるとは……何者ですか？」

少女が振り向くとそこには紫色の長髪に、鎖の付いたダガーを構え、眼帯をした女性がいた。

「何者よ。あんた?」

「私の名前はライダー。見たところ貴方も魔術師みたいですね。さあ、あなたのサーヴァントを…………つう!？」

女性が話している途中に、火の玉が女性の横を掠めた。

「全く、面倒な相手が来たみたいね。いいわ、相手してあげる。このリタ・モルディオが」

第6話 暗闇に潜む者たち（後書き）

次回、リタバカラライダーです。

第7話 ライダー→Sリタ（前書き）

今回はリタ→Sライダーの戦いが始まります。

第7話 ライダーVSリタ

リタがライダーと対峙している頃、ユーリ達は教室で突然発生した結界の中で倒れる生徒たちの状態を見ていた。

「マズイわね。この結界。生徒たちの生命力を奪っているみたい。このままいけば全員……」

「遠坂、どうするんだ?」のままだとみんなが……」

士郎がやつぱりと、ユーリとHスティルは……

「Hスティル。治癒術でどうにかできないか?」

「『』めんなさい。回復させてもこの結界が直ぐに奪っていくみたいなんですね。」

「じゃあ、この結界をどうにかしなきゃいけないってことか。凛、急いでこの結界止めるぞ!」

「そうね。衛宮くん、セイバー。とりあえずこの間結界を見つけた屋上まで行くわよ。」

「ああ、分かった。」

「分かりました。」

セイバーが一瞬で騎士甲冑の姿になり、凛たちは急いで屋上にある結界まで向かった。

屋上では、ライダーとリタが対峙していた。

「ファイヤーボール！」

「ふつ、その程度の火球で私を倒すのは無理です。」

ライダーは素早く動き、リタの攻撃を全て回避した。リタが放った攻撃は屋上の扉へあたり、爆発した。ライダーは攻撃を回避しリタに向かってダガーを投げつけた。ダガーはリタの腕に巻きついた。

「くつ、ちゅうと、離しなさいよ！」

「あなたの敵である私が言つむおりにするとと思つていてのですか？」

ライダーはダガーをもう一本取り出し、リタへ投げつけた。リタは避けようと後ろに避けようとすると、ライダーが鎖を前に引き、リタの動きを封じた。

「終わりですね。魔術師。」

ライダーが勝利を確信した瞬間、リタに放たれたダガーが何かに弾かれた。

「！？」

リタの前に現れたのは二バンボシを持ったユーリだった。

「ショートカット成功だな。」

「つて、ユーリ。こんな所にいたの？」

リタがユーリの姿を見て驚いていた。ユーリはリタを縛っていた鎖を切り取った。

一方その頃、凛たちは屋上へと向かっていた。

「たくつ、あんな無茶なショートカットあるかしら？」

凛が走りながらため息を付いていると、セイバーが真剣な表情をしていた。

「ですが、あの爆発音は一体……」

「ユーリはその爆発音が気になつて窓から屋上へと跳んでいましたが……」

「どんなだけ無茶な」とをするんだよ

士郎とエスティルが苦笑いしながら言つのであった。

「なるほど、貴方があのバーサーカーを退けたサーヴァントですか。

」

ライダーがユーリの姿を見て言つと、ライダーはアイマスクに手をかけた。

「あまり使いたくなかったですが、貴方ほど強さなら……使うしかりません」

そう言つてライダーがアイマスクを外し、カツと目を見開く。その瞬間、ユーリとリタの体に異変が起きた。

「ぐつ……！」

「これは……」

一人の体が突然重くなつた。

「私の目は石化の魔眼。私の視野に与つたもの全てを術中に囚われる。」

ライダーはユーリの両足にダガーを刺した。

「ぐあああああ！」

「ちょっと、あんたの相手は私よ。」

「悪いですが、本来の目的である聖杯戦争の参加魔術師とサーヴァントを倒すことを優先させます。」

ライダーはさらにダガーを投げつけ、ユーリの左肩と右脇腹にダガーが刺した。

「ぐりづ、」

「確実に止めを刺します。」

ライダーは自らの首にダガーを突き刺し、自ら血が吹き出て、ライダーの前で血が不気味な魔法陣を描き、魔法陣が光輝き、光がおさまり、前を見るとライダーの姿が無い。リタが上を見るとそこには翼の生えた白馬に乗ったライダーの姿があつた。

「何だありや？」

「ペガサス！？」

「そうです。天を自由に駆る神代の幻獣です！」

ライダーが話す。

「今、発動してる私の宝具”ブラッドフォード・アンドロメダ”とこの魔眼”キュベレイ”の力によつて動けない貴方にこの子の攻撃がかわせますか？」

ペガサスの頭を撫でながら話す。

「宝具つてアレか。ランサーが持つていた槍みたいなものか」

「ええ、これが私の宝具です。」

ライダーは握つていた手綱を見せた。

「！」の子は騎乗兵としての私の能力の具現！私の手綱はこの子の潜

在能力を極限まで発揮させる道具。これで終わりですね。ナイトの
「サーヴァント」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0888y/>

Fate / Vesperia

2011年11月17日21時29分発行